

ひぐらしのなく頃に
逆戻り編

ClariSと苺の樹

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ロボトミー社内で全ステータスEX越えだった職員（18歳）が某時計を使って過去に戻り、雛見沢でゆっくりまったり悠久の時を送ろうと奮闘する話。

基本的にlobotomycorporation要素一割、ひぐらし要素九割で進みます。

というかほぼひぐらしです。

目次

第3話	第2話	第1話
19	11	1

第1話

—— “Backward Clock
逆行時計”

“というものを皆様はご存じだろうか。

製造元の会社は今となつては分からない程古い時代に作られた時計の事だ。すでにこの時計の生産は中止されていて恐らくだがこの世で一つしかない時計だ。

『……どん底まで落ちてしまつて、もうこれ以上方法が見えませんか？』

あの時、他の選択をしていたら、という思いに囚われていませんか？

病氣や自然、宇宙をも征服した我々人類は ついに時間までも征服しました！』

という謳い文句の元、販売されたこの時計には全人類の望みとも呼べる機能が備わつていた。

『私たちはあなたが浪費した時を巻き戻すことができます。

使い方は簡単！ ただネジを回してから、目をつぶつて10秒数えてください。目を開けたら、あなたの過ぎてしまったあらゆる時が待つているはずですよ』

真空管ランプがデザインされているこの時計はなんと時間を遡る事ができるのだ。使用には莫大なエネルギーが必要とされリスクも相当なもののだが、それらを踏まえても十分に利をもたらす物である。

……突然だがここで私の身の上話をさせてもらおう。

私は警察官である父と図書館司書の母の間でこの世に生を授かった一人の人間である。兄弟はおらず二人は物心つく前に交通事故でこの世を去っていったらしい。私をここまで育ててくれた親戚の叔母さんからそう話を聞いた。

昔から私はどこか人とは違うのだ、そう思いながら生きてきた人生だった。

小学校の頃は飼育委員に立候補し、学校で飼っていた二羽の兎の飼育を行っていた。中学、高校になると学校単位で何かを飼育することがなくなったので、家で犬を一匹買ってもらった。

兎も犬も人と同じで生きている。それ即ちある時、突然の別れというものが訪れることがあるということだ。私が今まで生きてきた中で何かと生物を飼育しようと試みてきたのにはそれが理由だった。

小学校で飼育していた兎の内、一匹は私たちが学校を卒業するのを待たずに年を取ってこの世を去っていった。また、家で飼っていた犬も高校卒業間近の時、心臓疾患で死んでいった。

そのどのシーンを切り取っても、私は涙一つ流さず、心に何も響くことがなかったのだ。

私自身、悲しいという感情は持つているつもりだ。しかし“死”という概念に対しては関心を持たなかった。

いや、持てなかったといった方が正しいのかもしれない。

自分の中がどこか壊れてしまった原因に心当たりはあった。幼少期の両親の他界だろう。物心ついてないとはいえ、その一件で私は生き物の“生”を真つすぐ見つめることができなくなったのだと思う。自分自身のことまでも。

そんな時だった。

“ザ”
The Lobbotomy Corporation
の社員募集の広告が目に入ったのは。

The Lobbotomy Corporationは環境に優しいクリーンなエネルギーを生産する会社らしい。そしてどうやらその生産力は並大抵の電力会社を凌ぐ程だそうだ。

正直言つて私はこの広告を見たとき、どこかの誰かの悪戯だろうと鼻で笑つたのだ。それもそうだろう。“The Lobbotomy Corporation”なんて会社今まで生きてきた中で一言も聞かなかったからだ。試しにネットで検索してみたものの私が求めている情報は見つかることはなかった。

しかしホームページに明記されていたその会社のスローガンが私の心に大きな印象

を与えた。

“Face the fear, Build the future.”
 “未来を創るために、恐怖に立ち向かえ。”

その言葉は今まさに人生の路頭に迷っていた私に必要な言葉だった。私はすぐさま記されていた電話番号をかけた。その時はもはや藁にも縋る気持ちだったと思う。

電話に出たのは少し声の低い女性だった。まるで人を人とも思っていないような無機物を連想させる声だった。

その女性曰く、貴方はこの会社で働く素質があるとのこと。あの広告も素質のある人にしから見つけることができないらしい。発達している技術と人の潜在意識に呼び掛けるカウンセリングの融合らしい。

そして私は彼女の言葉に従い、日本から遠く離れた異郷へとやってくることとなったのだ。

因みに余談だが私はこの会社が設立して以来、最年少の職員らしい。まだ大学も卒業せずこっちに来てしまったから致し方ないところもある。叔母さんには突然家を出て行って申し訳ないことをしてしまった。もう二度と会うことはないだろうが。

察しの良い人ならもう気付いているだろうが、この会社はクリーンなエネルギーを危険極まりない手段によって生み出していたのだ。具体的には怪物……というか“概念”の様なもの、“アブノーマリテイ”を管理してエネルギーを抽出するのだ。勿論

その行動には安全ではなく、昨日まで話していた同僚や先輩、後輩が明日には肉塊へと変わっていることなんて日常茶飯事だ。

だが、私はこの会社をとても気に入っていた。何故ならば、私は「死を感じる事」がとてもうれしいことだったからだ。ここで働いている間だけ私は「生」と向き合うことができるからだ。

……話が長くなったがこれが私がこの殺伐とした会社に勤務する事となった経緯である。ここからどうやって冒頭の話に繋がるのか。それについては偏にアブノーマリテイの脱走が原因だった。

アブノーマリテイの中には「逆行時計」のような生きていない置物のようなものもあれば生きているものも存在する。それらが与えられている収容部屋から脱走するのだ。それはもはやA級手配の殺人鬼が歩いているのと等しいことである。いや、たかが殺人鬼ならいくら良かったことだろうか。

そして一体でも脱走すると面倒くさいアブノーマリテイだが、稀に偶然が重なり大量脱走が起こる。その日も突然のアラームが緊急の知らせを知らせ社内には緊張が走った。

私はその時既に入社して結構な日数が経つベテラン職員だったのだ。未だに身長は160も超えていなかったが。

しかしながらその日は私が入社して以来一番酷いものだった。最後に聞いた損害報

告は全体の約七割がアブノーマリテイによって落とされていた。これはこの会社が設立して以来の大規模な「事故」だった。

そんな手も付けられなくなった状況だったがここで上は一つの指令を出した。それが「逆行時計」を使用することだった。

前述のとおり逆行時計には時を遡る機能が備わっていた。これを使用することによって各アブノーマリテイが脱走する前まで時間を戻そうという算段だった。

しかしながらここで一つ問題が発生した。誰がこの装置を起動するかという話だ。

実を言うとこの装置エネルギーを溜めて使用した時最後に触ったものは時空の彼方に飛ばされる……らしい。そしてもう一つ条件があり、起動させる人が十分な技能を持つていないとその時計を中心とした半径十キロの生物が死んでしまうというものだ。これらの事はこの時計の説明書に記されていたことだった。要はこの会社を守る代わりに誰か一人が犠牲になる必要があったのだ。

当然誰が行くか、と探り合いになった。だが事態は一刻を争っていた。もたもたしている時間がない。しかし……、と部署内で沈黙が続いた中、

『自分が行きます』

私の名乗りを上げた。

仲間の制止を聞かず、急いで私は「逆行時計」が収容されている場所へと向かった。

この時、胸の中に自然と恐怖は湧かなかつた。この時の私は、かつて心を塞いで目を背けていたあの時の自分ではなかつた。数多くの人を守り、未来に希望を託す、そんな存在となっていたのだ。

収容部屋へとたどり着いた私の前には、ごうごうと音を立てて光り輝いている古く人並みの大きさを持つ時計が置かれていた。

私はその時計に付属しているネジを躊躇なく掴み、回し始めた。

思えばこんな私だったが何かの役に立てたのか、と思いふける自分がいた。この身が消滅してしまうことに恐れなんてものはなかつた。強いてあげるとすれば、遙か遠くの故郷に置いてきたここまで育ててくれた叔母さんに感謝の手紙を書けなかつたことが唯一の気掛かりだった。

収容部屋に次第に光が満ちてきた。目の前の時計が熱を放つ。

そして私の視界は真つ白に染まり――

カナカナカナカナ……

キキキキキキ……

気が付くとそこは目を見張る程美しい夕焼けが一面に広がっていた。

ひぐらしのなく頃に 逆戻り編

天国とはかくも美しい物なのか。

この光景を見るとやはりそうなのかと思えてしまうほどに目の前を沈んでいく夕日は私の心を優しく照らしていた。

「綺麗だな、響也」

そう誰かが私に話しかけてきた。

振り向くとそこには私の背丈を軽く超える身長 of 男性がいた。

というか私の父だった。

私は自分の両親にあつた記憶は無いが、よく叔母さんが私に彼らの写真をよく見せてくれたのだ。だから目の前の男に面識がなくても私は彼の事を見間違えるはずも無く正真正銘私の父であると理解する事が出来たのだ。

なぜここに父が、とは思わなかった。何故ならここは死後の世界なのだからだ。あの

日「逆行時計」のネジを回した時に私の人生は幕を閉じていたのだ。

「パパー、響ちやーん、そろそろ行くようよー」

少し離れたところに止めてある車の傍でそう声を出して手を振っている女性も、間違はなく、私の母だった。

どこか厳しい印象を持たせる父とは逆に、写真の中の母はいつもふんわりと笑っていた。陰と陽の様な2人だった、と叔母さんは少し笑いながら言っていたが、それもあながち間違いではないと今となつてはそう思う。

何故なら陰Yinと陽Yangは二つで一つ。どちらが欠けていても行けないからだ。

私の両親は二人一緒に死ぬ時までお互いを思い、愛し合っていたのだろう。

そんな2人の事を目頭が熱くなるのを感じた。

嗚呼、こんな私にこれ程までに幸せな事が有っていいのだろうか。こんな私がこれ程までに報われて良いのだろうか。最早目なら流れ落ちる雫を抑えることは出来なかった。

困惑している父に向かつて思わず私は抱きついた。私の手から感じる温もり、生命の鼓動、それらが生きていくことを証明するものであった。

もしかすると私はどこか心の中で彼らに会えることを期待していたのかもしれない。死ぬことで私は父と母2人の元へ会いに行けると思っていたのかも知れない。

「どうした響也、新しい所に来て感動しているのか」

そうどこかの外的なことを言う父を見上げる。彼の言っていることはあながち間違っていない。新しいところ。新しい居場所に来ることが出来て、私はこれほどまでに感動しているのだった。

父は泣きじやくる私を軽く抱っこして母の待つ車へと向かった。

父と母の話の聞くに、どうやらこの車はつい先日建てたばかりの新しい家へと向かうとの事。

車に乗り込んで車の窓を落ちない程度に開けてみる。どこか懐かしさを感じる匂いがして一日の終わりを連想させるような夏の風物詩の蝸ひぐらしがカナカナと鳴いていた。

第2話

どうやらここは死後の世界では無いらしい。

その事に気がついたのは私がこの世界にやって来て、父と母と車に乗り込んで新居に着いて、その次の日のことだった。

前世……というのも可笑しいのかもしれないが、以前から私は背丈が人並みほど高くなかった。というか低かった。

私の唯一のコンプレックスだったのだが、朝起きてみると以前より視線が低い。まさかなと思いきや家に置いてあった大きな鏡で全体像を見てみた。

確かに鏡には私が映っていた。しかし私の眼はごまかされなかった。

私は前世の時よりも自身の伸長が縮んでいることに気が付いたのだ。

そう、気がついてしまったのだ……。

The Mountain of Smiling Bodies
笑う死体の山が突っ込んできた時以上の絶望が私の身に襲いか

かったのだった。

その旨を台所で朝食を作っていた母に聞いたところ、

『響ちゃんの身長はちゃんと伸びていますよ。だから安心してご飯沢山食べてね!』

と満面の笑みで答えてくれた。今日も母は元氣一杯のようだ。

どうやら私の身長は生まれてから縮むようなことは無かつたらしい。ということは前々から私の身長がこの高さであった、ということになる。

どういう事なのかと人物思いに耽っていると一つ大事なことを思い出した。

そう私がこの世界に来ることとなった原因。『逆行時計』についてである。

あの時計の機能としては、時間を巻き戻す。そして最終的に使用した職員も消し去ってしまう、というものだ。

そう消し去ってしまう。この描写について実際には間違いであったのかもしれないという点についてである。

何故なら消し去るとは残された側の解釈であって、使用者からはどうなのか確認することが出来ないのだ。確認しようにも当の本人は既にこの世界から消え去っているのだから。

だが実際には消え去らずに逆行しているのならどうだろうか。

『逆行時計』の機能が及ぶ範囲はとても広い。ならそのエネルギーが一番近い場所

にいる人も逆行してしまうのではないのか。ありえない話でもないと思は思う。

しかしながらこの世界にも疑問はある。私の両親が健在ということだ。

新しい自分の部屋を確認したところ、私はどうやら14歳、中学二年生だということが分かった。元の世界だと、この年齢の時はとつくの昔に両親は他界し、叔母さんの家で生活していた。

だが、この世界では両親は生きている。昨日の内に事件のあったであろう日のことを尋ねてみると、恙無く2人のドライブを楽しんでいたらしい。

これらのことからこの世界は死後の世界などではなく、時間が遡り、尚且つ、あったかもしれないもしかしたらの世界だということだ。つまり元いた時間軸Aの世界で“逆行時計”を使用し、時間軸Xの過去に戻ったのである。

この現象は私の運が良かったからなのだろうか。もしかすると本当に消滅していただらうに。私は会うことのなかった両親とこうして巡り会うことが出来たのだから。

さて、そんな私だがどうやら中学二年生まで年齢が遡っているようだ。心無しか体も軽い気がしてくる。と言っても前世の私もティーンエイジャーなのだが。

両親は今世でも都会暮らしのようだ。叔母さんによると2人とも都会育ちらしい。だからなのか、両親は仕事の転勤をきっかけに田舎に引っ越すことにしたそうだ。

古き良き街並み、懐かしみを感じる家々。そんな難見沢に私達家族は引っ越してき

た。

昭和58年5月、2度目となる学校生活は雛見沢分校という場所らしい。小中一貫の小さな学校だ。人口約2000人の小規模な村だから致し方ない。

校舎に入るとどこか古臭い匂いが鼻を通った。だが不思議と嫌な気分ではない。あんな死と隣り合わせの世界よりも平和でほのぼのとした場所の方が私には合っているのかもしれない。

それにしてもやはり学校というものは何時になっても緊張するものだ。教壇の前に立って生徒の方を見る。ほとんどの生徒が私よりも年齢が低いのだろう。皆何かに期待しているようなキラキラとした目で私を見つめていた。

まあそんな視線で見つめられても私には期待に応えられるような自己紹介欄は出来ないがな。

「よう！ 俺の名前は前原圭一っていうんだ。あんたの名前は……石原響也か。これからよろしくな！」

そう気さくに話しかけてきたのは前原圭一。人当たりのよさそうな好印象を持てる

青年だ。

「はうー！ 私の名前は竜宮レナ、気軽にレナって呼んでね！ それにしても随分とちっちゃいね。はうう！ お持ち帰りー！」

そう言つて私を『持ち帰り』しようとするこの子は竜宮レナというらしい。『持ち帰り』されるのは基本的にかわいらしい子供たちらしく、私もその類に含まれていると思うと少しだけ悲しさがこみあげてくる。それにしてもレナは女子にしては体つきがしつかりとしている。もしかしたら単純なスピードなら私を凌駕する可能性もある。

「ここから、圭ちゃんもレナもそんなに詰め寄らない詰め寄らない。おじさんたちだつて響也君と喋りたいんだからね」

私に真つ先に話しかけてきた二人を後ろから諫めているのは園崎魅音。この地域のお偉いさんの娘らしい。周りの子と比べると大人びていることからこのクラス……というよりもこの学校のリーダー的存在だという事が分かる。

「おーっほっほ！ 響也さんは見た感じ随分と抜けているようですが、そんなんで毎日やってくる私のトラップ地獄を耐えられるかしら？」

「にぱー☆沙都子、新しくやってきた仲間肆意悪したら駄目ですよー」

そして彼女たちの近くにいる小さい子たちは北条沙都子と古出梨花。沙都子はトラップの達人らしく裏山は既にダンジョンの様に魔改造去れているとのこと（圭一談）。

梨花ちゃんは魅音さんと同じくここいらで権力を持っている嬢ちゃんなのだ。可愛らしい見た目と挙動だがその裏では家柄が深く結びついているのかもしれない。

……実は沙都子に『抜けている』と言われたことを少しだけ気にしている。そんな気が抜けてしまっていたのか。これでも幾度の死地を潜り抜けてきたのだが。

さて、これから外で体育の授業をするらしい。一応家にあつた体操服を持ってきておいたが、それが功を奏しようだ。

ひとまず私はお手洗いに行きたかったので、いまだに質問を続けている子供たちに一言謝りを告げて席を立った。

「トイレ……? ああ、それなら廊下を出て少し進んだところの右手にあるぞ。……ん？」

どうかしたのか圭一、私の尻を見つめて。まさかお前はソツチの気が……。

「断じて違う！ 俺は今までも、そしてこれからも女が好きだ！ ってそうじゃなくて、なんかお尻に付いてね」

……?

「……これ画鋏じゃねえか！ おい沙都子。お前危ないからこういう悪戯はやめろって前から何回も言ってるだろ！」

なんと。

「あらあら圭一さん、私がやったという証拠がどこにありますか？」

「まあまあ圭一君も落ち着いて。圭一君だつて入学の時はこれを受けて緊張がほぐれたんでしょ？」

「確かに……」

成程。沙都子はただの悪戯つ子だと思つていたが、ちゃんと気遣いができるしつかりした子だったのだな。偉い偉い。

「ふん！ 私を侮らないでくださいまし！ って頭を撫でるな——」

「それにしてもお尻に画鋏が刺さつたのに顔色一つ変えないなんて、響也はすごいのです——」

「いやいや、もしかしたらただの鈍感さんかもしれないよ——」

……魅音にまでそういうられると認めるしかないのかもしれない。

「ん、そろそろ体育にいかなくちゃ。もう授業が始まっちゃうよ」

「そうだな。魅音今日は何をやるんだ？」

「そうだねえ……。今日は響ちゃん初めての授業だし、鬼ごっこで行こう！」

そう行つて着替えに動く彼らたちの事を見ているとこんな生活も悪くないって思うようになった。前世とは真逆の騒がしさが不思議と心地よく感じる。

彼らにとって私はもうすでに『仲間』なのだろう。それはこの狭い難見沢村で育つた

からこそその絆のなのだ。

彼らよりも長く生きてはいるがまだまだ学ぶことは多そうである。そう思いながら彼らに遅れないように素早く立ち上がった。

第3話

久しぶりの中学校生活初日はあっという間に終わってしまった。

体育の時間は教師が特に授業について口を出すことがなく、生徒の自主性に任せたとてものびのびとしたものだった体育だけでなく、ほかの授業も一般的な学校とは違う形式で進んでいった。

こういうのも悪くはない。

「「さようならー」」

さて、授業が終わると私には特にすることはなく、この町の地理情報を把握しようかと思っていたが、どうやら圭一達は部活動を行っているらしく、それに着いて行くことにした。因みに特に名前は決まっておらず、彼らは単に『部活』と呼んでいる。シンブルな名称であるがゆえに私はどのような部活なのか、と年相応にわくわくした。

「あれ、響也君、私たちの部活に入りたいの？」

動き出したレナに私の意志を告げると彼女は少し驚いたような顔をしていた。そこに横から圭一がニヤニヤ顔で腕を組みながら私にこう言った。

「本気なのか……？ 俺らの部活は生半可な気持ちで入部していいようなもんじゃない

ぞ。毎日が己の命を懸けた熱い試合。勝者には栄光を、そして敗者には恐ろしい罰が待っている。……それでも入りたいと思うのか？」

なんと。

驚くべきことに彼らが行っているのはただの部活などではなく、私がかつて働いていたロボトミー社あと似たような境地のものだというのだ。たかが田舎の小さな学校の部活と思っていたがどうやら私は彼らの事を侮っていたようだ。

「みー、そんなに身構えなくてもだいじょうぶなのです。圭一も誇張しすぎなのですよ」「そうそう、私たちは放課後になるとこの五人で集まってカードゲームやボードゲーム、テーブルゲームなど多種多様なゲームで競い合っているんだよ。圭ちゃんも初めはよそよそしかったけど今じゃ立派な部活メンバーさ。こんなに大きくなっておじさんとっても嬉しいよー」

「はっ、そう言っていてられるのも今の内だけ、魅音！ 今日という今日は皆に勝って貴様にメイド服を着させてやるのだ！」

どうやら命をかけた闘いというのは圭一の言葉の綾だったらしい。流石にあんな荒んだ世界とこんなにも平和な村が同じであるはずがない。あれは悪い意味で特別な世界だったと今になって理解できた。

「というかその年で『働いていた』なんて冗談が過ぎませんか？ そんなに見栄を張りた

いのならもう少しましな嘘をつくことですね！」

ん、こんなところにちようどよいひじおきがー。

「きやあああ!?　ちよつ、ちよつと頭をひじでぐりぐりするのをやめてくださいまし！
髪が崩れてしまいますわ！」

「響也、ごめんなさいなのです。沙都子は背丈の近い異性に戸惑っていて、少し素直になれないだけなのですよ」

「り、梨花！　あることないこと言うのはやめてくださいまし！」

「にばー☆」

成程、素直になれないお年頃なのか。ならば今回はこのことについては不問としよう。だが次はないからな。

そう言つて私は沙都子の頭から手をどかしたのだが、沙都子は何か言いたげだった。とても意志が強い子である。

「そんなんじやありませんのに……」

「ははは！　今日一日で随分と仲良くなつたようだね。よおし、私がここで響ちゃんが入部することを許可してあげよう！」

嬉しい事に魅音が私の入部を認めてくれた。そのことに圭一たちは異論は無いよう
で——沙都子だけは私の事を恨めしい目で見ていたが——それを確認した魅音がうん、

とうなずいていた。なんだか部員としてだけでなく、彼女らの一員としても認められたようで私は少しだけ胸が熱くなった。

「それじゃあ今日は……『ジジ抜き』でもやろうかな」

「なっ……。成程、それは面白そうだな！」

「おーっほっほ！ 圭さんは今回も負けないように頑張ってくださいね？」

「沙都子の方こそ、いつまでも上にいると思っていたら大間違いだからな！」

今日のゲームはジジ抜き。ジョーカーを抜いた五十二枚の中から一枚見ないように除外し、その状態でババ抜きの様にカードのペアを作っていくというものだ。そう言っ
て魅音は引き出しから年季の入ったトランプを取り出して全員に配っていった。

「響也はこういうゲームは強かったりするの？」

魅音が六人にカードを配っている最中に圭一にこんなことを聞かれた。

実を言うと、私はこの手のゲームはルールは知っているもの、あまりやったことのないのだ。理由としては高校中退して入社したこともあるが、小学校や中学校では友達と叫ぶ人がいなかったのだ。どこか他人と一線を引いていたんだろう。相手に踏み込み過ぎず、相手に極度に踏み込まれないよう慎重に生きてきたと記憶している。

そんなことをぼかして彼に告げると彼の私を見る目が少しだけ変わった気がした。

「確か響也は東京から来たんだっけ……。……。そうだよな。理由もなくこんな田舎の村に東京の人が来ないもんな。悪い、いやなこと聞いちゃまって」

そう言つて彼は私に謝罪してきた。

……非常に面倒くさい誤解をされた気がする。

そんなことをしている内にどうやらトランプを配り終えたみたいだ。

さて、私のカードはというと……。ハートとスペードの9のペアしか揃わず七枚という少し悪い状況からのスタートとなった。梨花ちゃんが沙都子のカードを引き始めてゲームは始まった。

皆は着実に自分の手札を減らしていつている。カードを引くのには迷いが見えない。よほど彼女らはこのゲームに自信を持っているのだろう。

ゲームも佳境に差し掛かってきた。

既に一枚しか持つていないのは魅音と梨花ちゃん。沙都子とレナは二枚持つていて、圭一は三枚。そして私は私は五枚も持つていた。

やったことはあまりないとは言つたもののこの子の様子ではそれ以前の問題である。何

かコツでもあるのだろうか。

そして梨花ちゃん私の手札を引こうとしたとき、テーブルをはさんで向かいの魅音が悪い顔で私のカードを見ながらこう言った。

「ふっふっふ。響ちゃんのカードを右から当ててあげようか」

……何？

「響ちゃんの手札は右からA、^{エース}6、7、^{クイーン}Q、^{キング}Kだね。当たってる？」

……その通り。彼女の言う通り私の手札はその五枚である。

そんな事を私は言われたが驚きはあまりなかった。彼らがカードを引く時八割九割の確率でペアができていたからだ。明らかにゲームがきれいに進み過ぎていて少し違和感を覚えていたのだ。

彼女の表情から分かる自信から今の言葉が勘の類のものではない事が分かる。ではなぜ私の手札を見ずに当てる事が出来たのか。

『——そう言つて魅音は引き出しから年季の入ったトランプを取り出して全員に配つていった』

……そのタネとは恐らくこの年季の入ったカードについている傷を目印としているのだろう。それに気づいた私は咄嗟にカードの裏面を手で隠した。しかしながらその行動をするには遅かった。

「隠さなくても貴方のカードはすべて分かりますわ。ゲームが始まった時からすでにあなたは詰チエックメイトみでしてよ！」

「因みにジジはスペードのKキングだよ。右から三番目のカードだね」

沙都子とレナから声が入った。年季が入っているということはそれほどまでに彼女たちがこのジジ抜きをやりこんだのだろう。相手の手が分かる、裏を返せば自分の手も相手に知られるという事だ。そんな中彼女たちは勝ちを目指して日々競い合っているのだと思うと、ただ遊んで終わりのような甘い部活などではない事が感じられた。

「きつとこれがハートの6です……。はいっ、上がりなのです！」

にばー☆つとした満面の笑みで上がった梨花ちゃんに続いて魅音、沙都子、レナと上がっていき……。

「よし！ これで俺の勝ちだ！」

圭一が私のダイヤのAエースを引き当てて上がった。結局私は最下位となった。

「案の定響ちゃんが最下位だったね。それじゃ敗者には……これを着てもらいましょうか！」

そう言って魅音がどこからともなく取り出したのは黒と白のシンプルなメイド服だった。フリルまでついていて完全に女性用である。

これを着るのか。私が。

「そうでごさいますよ。さあ早くその可愛らしい服に着替えて『ご主人さま』と私に奉仕するのですわ！」

……ふむ。

どうやら私は彼女たちにとっていいエサのようであった。

こうして記念すべき雛見沢村での初めての部活は私の負けという形で終えたのだ。た。

まあ女装するのに何のためらいもなく着替えることが出来るほどに私は
愛と憎しみの名の^{in the name of love and hate}もとに鍛えられているのだが。

「つてちよつとここで着替えなないでくださいまし！」

「はうー！ お持ち帰りー！」

「……レナ、鼻血出てるぞ」